

図書館蔵書に対する評価は、その量よりも質にあることは言うまでもないが、その質的条件の中にどのような稀観本（きこうぼん）

本館

稀

観

本蔵

所蔵

世間に流布されていない珍しい書物）が収蔵されているかがある。については専門の立場から本館所蔵の稀観本を紹介することとした。

の中から

西洋服飾稀観書 (22) ボー・ブランメルに関する二つの書

講師（西洋服装史担当） 富 樫 慧 子

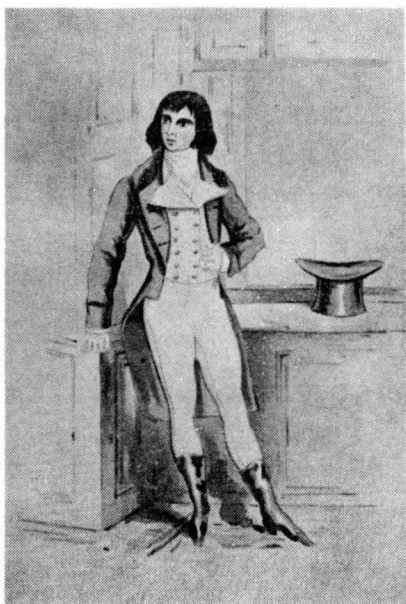
ジョージ・ブランメル George Brummell (1778—1840) は、我が国では一般的であるとは言えない。たとえばカトリーヌ・ド・メディシス、マリー・アントワネット、ジョセフィーヌ皇妃など、女性のファッション・リーダーの知名度と思い比べた時、それはいささか不公平のように思われる。ボー・Beau（素敵）の異名をとった英国のブランメルこそ18世紀から19世紀への過渡期にあって、現代男子服の一端を基礎づけ、生前は「ダンディズムの神様」と仰がれ、死後も永く、粋な男性の鑑となった人物だからである。今回は本学所蔵のブランメルに関する文献2点を紹介しようと思う。一つは伝記であり、もう一つは彼自身の著作である。

〔289. B. 1, 2〕 Jesse, Captain: The Life of George Brummell. John C. Nimmo, Lond., 1886
ジェシ著「ブランメルの生涯」それぞれ360余頁に及ぶ2巻からなるこの大著は、ブランメルの死後4年目の1844年に出版された初版の改訂増補版であ

る。この'86年版の序文によれば、当時すでに著者は亡く、存命中の登場人物への遠慮から初版の折には割愛された多くの資料を挿入したものである。初版の部数は極少であったらしいが、'86年版も英米両国合せて500部の限定出版であるから、やはり稀観書と言えよう。恐らくブランメルの伝記としては最も詳細で、正確を期した著作と思われるが、その文体を通してダンディの生き方や感じ方を汲み取ることができる。

著者については残念ながら詳らかでないが、内容からはブランメルのイートン校時代の下級生であり、一時的断絶はあったにせよ、生涯この主人公と交友を保ち続けたことが推察される。内容は著者がブランメル自身やその友人達から直接聴取した話、及びブランメルが友人、知人に宛てた手紙などからなっている。冒頭には著者と主人公との最初の出会いの場面が記され、そこにはすでに未来のダンディの魅力と、それに対する筆者の傾倒ぶりが伺われ

① 青年時代のジョージ・ブランメル



② 若き日のウェールズ公 後のジョージ四世
ブランメルの良き理解者・援護者であり、自らも当代一流の洒落者だったが、後に仲たがいをした。



る。また数々の風説や醜聞の誤りを訂正し、ブランメルの名誉挽回を計る箇所には著者の敬愛の情すらうかがわれて微笑ましさを覚える。

ここで、この伝記作家を虜にしたブランメルとそのダンディズムについて触れておこう。18世紀までの男子服はその豊かな色彩、華かな装飾という点では、女子服と大差が無かった。ブランメルの生きた時代には、男性はそうした服装に訣別を告げ、男性独自の雅致、ダンディズムを形成しつつあり、彼は人々にその最高の極意を示した。落ち着いた、むしろ目立たない色彩、身体に程良くフィットする仕立て、優雅なクラヴァットの結び方に対する好み、物静かな身ごなし……これらが高度に完成されたのはブランメルによってである。

しかしその名が普遍的でなかった要因の一つは、彼自身の内面性にあるといえよう。巧みな機知に富んだ話術と博識、文才を身につけながら出版を拒み続けた彼は、その一切を後世に残そうとはしなかった。優雅な服装も身のこなしも死と共に消えてしまい、彼を語るにはその知友の記憶と書簡類に頼る外はないのである。名誉ある頭職も、王太子から寄せられた並はずれた愛顧をも自ら振り捨て、子孫を残さず、僅かな財産は使い果して、むしろ借財を残して逝った一介の市民を誰が覚えていようか。にもかかわらず彼の名は、文学者達、ことにロマン派、象

徴派、これに近いグループの人々の関心を少なからず、今日まで集め続けてきている。彼等文学者達にとってのブランメルは、単なる外観上の洒落者だけではなく、背後にあった明瞭な個性と孤高の魂、またそれを昂めようとし続けたアイデンティティーへの強烈な追求に捧げられた生涯の持主なのであった。数少ない日本のダンディズム研究の著作の一つである生田耕作著「ダンディズム——栄光と悲惨」の、「本書もまた多くの読者を期待していない」という後書きにも、ブランメルその人に通じるこの文学者特有の内面が偲ばれる。この比較的未開拓な領域は、文学者のみに委ねられることなく、服飾の分野からの今後の追究も望まれるところである。

[383. 1. B] Brummell, Beau (George Bryan Brummell); Male and Female Costume. Doubleday, Doran & Company, N.Y., 1932 ブランメル著「男性と女性の服装、古代ギリシア、ローマの服装、並びにローマ人侵略から1822年までのイギリス人の服装、及び現代の良き装いのための服装の原理」。まとまった著作を残さなかったブランメルの遺稿を、今世紀に入ってから編集した文献である。文体は難解であるが彼の博識に驚かされる部分も多く、中でも「服装の原理」の章には彼の服装に対する美感、趣味性、識見等が見られ、ダンディズム研究には見逃すことのできない文献の一つである。



③ カエン（仏）での晩年のブランメル 最後まで身だしなみをくずさなかったが、当時としてはもう幾分古風な服装である。



④ The broken (Beau) Bow と題がつけられたブランメルの手紙に添えられたスケッチ。Beau（素敵な）とBow（弓）とをかけている。